

平塚らいてうと宮沢賢治の「協同」思想

米 田 佐代子

The Thoughts of Cooperation Seen in the Works of Raicho Hiratsuka and Kenji Miyazawa
Sayoko YONEDA

SUMMARY : It has been believed that Raicho Hiratsuka, a philosopher of women's liberation, and Kenji Miyazawa, a famous poet, were under the influence of reactionary nationalism which regarded the Japanese Emperor as a god.

However, both of them had great expectations of a society where the equality of all people would be established; they were no sympathizers to nationalism. They tried to save the victims of the recession in 1930's by organizing cooperatives. Thus, we can see Raicho and Kenji shared the thoughts of cooperation.

Keywords : Raicho Hiratsuka (平塚らいてう), Kenji Miyazawa (宮沢賢治)
Cooperative society (協同社会), Women's history (女性史)

はじめに

平塚らいてうと宮沢賢治——あらゆる意味で対照的であり何の接点もないと思われるこのふたりが、まったく交流がなかったにもかかわらず、1931年という歴史的時点にあって、「協同組合による人びとの解放」という共通の認識を持っていた、というのが小論のテーマである。それは偶然の一致ではなく、らいてうと賢治が共有した1920年代から30年代のはじめにかけての10年余り、それぞれが独自の思想的となみのなかで自己と社会の解放を求めて模索した結果であり、いわば時代のなせるわざとも言えるものである。ふたりの認識の共通性を指摘することが、これまでの賢治論あるいはらいてう論、さらにはファシズム前夜と呼ばれる時代認識にどのような視点をつけ加えることになるだろうか。小論はその試みの一作業である。

I らいてうと賢治の評価をめぐる

1996年に生誕百年を迎えた宮沢賢治について、彼が戦時中も生きていたら、ファシストになっていたかもしれないという評価があることを知った。

たとえば大正デモクラシー期という「多くのインテリゲンチヤがデモクラシーの渦の方に身を投じたその時代に、賢治はファシズム団体国柱会へと走っている」として、賢治と「ファシストたちの主張の類似性」を強調する見解¹⁾や、「賢治が生きながらえていたら、彼の法華經主義が天皇翼賛に合流しなかったとは誰も保証できない」といったみかた²⁾等である。

その論拠の多くは、1920年代に賢治が傾倒した日蓮宗の在家仏教団体である国柱会が、創始者田中智学のもとで熱烈な「国体主義」をかかげ、門下生の石原莞爾をはじめ日本の中国侵略を合理化する思想と行動を育てることによって「天皇制イデオロギーの美化」³⁾をはかった事実にある。賢治が国柱会に属し、「今や日蓮上人に従ひ奉る様に田中先生に絶対に服従致します。御命令さへあれば私はシベリヤの凍原にも支那の内地にも参ります」⁴⁾と書き、「世界唯一ノ大尊師日蓮大上人」⁵⁾と断言した事実は、しばしば「賢治研究者を困惑させるもの」⁶⁾とみられてきた。賢治と国柱会とのかわりを、国柱会が国体主義中心になったことによって「入信当時とははだいに变化し、冷却した」⁷⁾とする見解もあるがこれに対しては賢治が「国柱会の国家主義的教説に批判的になったとか、これに対して否定的な新たな

立場に立ったなどと考えるのは早計である」⁸⁾とする反論があり、「敬愛する人物が自分が誤りと思っている思想なり心情を抱いていた、今の時代にあまり受け入れられない、むしろ排斥されているような思想の持ち主であって欲しくないという心情」から「客観的な事実に敢えて目をおおったり、捻じ曲げたりする」⁹⁾ことをいましめる主張となっている。

ここからは賢治と国柱会のかかわりを認めつつ、「国柱会は国粹主義的ではあったが、単なる国家主義ではなく、『人類の究竟救済を実現するに努むるを以て主義と為し……』(国柱会創始の宣言)といった救世思想を強くもっていた」¹⁰⁾ところに賢治の理想との共通性を求める見解もある。しかし、賢治が死のわずか1か月前、招集されて満州の戦線にいたもと羅須地人協会会員伊藤与蔵にあてた書簡で、「万里の長城に日章旗が翻へるとか、北京(昔の)を南方指呼の間に望んで全軍傲らず水のやうに静まり返ってゐるといふやうなことは、私共が全くの子供のときから何べんもどこかで見た絵であるやうにも思ひ、あらゆる辛酸に尚よく耐へてその中に参加してゐられる方々が何とも羨しく……既に熱河錦州の民が皇化を讃へて生活の堵に安じてゐるといふやうなこと、いろいろこの三年の間の世界の転変を不思議なやうにさへ思ひます」¹¹⁾と書いたことに対し、天沢退二郎は、「(本心からそう思っているのではないにせよ)あのいわゆる宇宙感覚・コスミックな想像力の持主である宮沢賢治という抜きんでた一個人の生活意識を一方でいいようもなく偏狭なものにとどめさせた地域的・時代的制約をじつによく実感させるもの」と批評した。天沢によれば賢治のその限界とは、賢治にとって文学の意味自体が「こうした二重三重に制約された生活意識からの解放」にあったのだが「その解放が現実から上方への脱出ではなくて、現実そのものの意識における変質」¹²⁾に過ぎなかったというのである。

農民芸術の創造をめざした羅須地人協会の空想性と非現実性については、多くの論者が認めることである。賢治は一方で貧しい農民の救済を強く求めて自ら実践者になろうとしたが挫折し、「グスコブドリの伝記」や「銀河鉄道の夜」にみられる自己犠牲の世界へと入り込んでいったとみるのが通説に近く、そこから有名な「雨ニモ負

ケズ」論争も生まれたように思われる。戦時中「欲しがりません勝つまでは」のスローガンとほとんど同列に扱われたこの「詩」について、中村稔は「羅須地人協会からの全面的退却」と『農民芸術概論』の理想主義の完全な敗北」を読みとり、「賢治がふと書きおとした過失のようなもの」¹³⁾と位置づけて、谷川徹三らとの間に激しい論争をまき起こした¹⁴⁾。

これらの議論からうかびあがってくる問題点は二つあると考えられる。一つは賢治が羅須地人協会の「失敗」以後、敗北感と挫折感のうちに死を迎えたとするみかたの是非であり、それとかかわってもう一つは、そのように現実を具体的に“解放”するプログラムを持ち得なかった賢治は、地域的・時代的に制約を受けた「偏狭な生活意識」の持ち主にとどまっていたのかという問いである。もしそうだとすれば、「もし仮に賢治がその後も生きつづけ、昭和16年12月8日を迎えていたとしたら、三好達治のように『捷報いたる』とか、高村光太郎のように『天皇あやふし』と書くことになるのだろうか」¹⁵⁾という疑問が投げかけられても不思議ではないだろう。

もちろんこのような仮説を立てること自体にそれほど大きな意味があるとはいえない。筆者がこのことにこだわるのは、筆者の研究対象であり、戦時下を生み身の人間として生きた平塚らいてうは、現実「に「こういう現人神にまします天皇を載き、万民の心が常に天皇を中心として、いついかなる場合にも立ちどころに天皇に帰一し奉ることのできる国に生まれ合わせた幸福」¹⁶⁾といった文章を書き、そのことによって戦時下のらいてうは「皇国史観」にとりこまれ、「戦争加担」の責任を負ったと批判される事実をどうみるか、という問題関心からである。

この点について筆者はすでに別稿を発表し、らいてうだけでなく、戦時中の日本人の「戦争責任」をどう説明してゆくかについての見解を述べてある¹⁷⁾。そこで強調したことは、こうした問題を考えるとき、一つは当事者の個々の発言だけを抜き出して非難の論評をするのではなく、ひとりの人間のトータルな思想のいとなみのなかから出てきた発言として、その歴史的意味を踏まえるべきこと、いいかえればなぜそのような発言に至るかを追求すべきであること、もう一つは、当事者の思

想自身のなかに、こうした発言を克服してゆく可能性をさぐりあてられるかどうかを問題にすべきであることの二点であった。らいてうは戦後長く生き、そのことによって、いわば戦時下の“未清算の過去”を清算する方向へと歩むことができたといえる¹⁸⁾。だが、日本の侵略戦争本格化の前夜というべき1933年に死んだ賢治には、その可能性はないのだろうか。ここでもう一度ふり返りたいことは、死の直前、賢治ははたして現実を動かすプログラムを持ち得ず、挫折と敗北のうちに美しい自己犠牲の精神にたどりついたのか、という問いである。もちろん賢治の「求道者」としてのあゆみは生涯止まることを知らなかったとする指摘もある¹⁹⁾。しかし、あの羅須地人協会の挫折の後の賢治はもう少しはっきりと、現実をつくり変えようとするプログラムを持っていたのではないだろうか。それが冒頭にかかげた「協同組合」構想であったというのが、筆者の仮説である。具体的には1922年ごろから「ポランの広場」として書きはじめられ、1927年ごろには「ポラーノの広場」として、そして1931年ごろに大幅な手入れがおこなわれるとみられる作品が、検討の対象となる²⁰⁾。今日最終形として提示されている「ポラーノの広場」は、どちらかという農民とともに生きようとした主人公キュースト（賢治の分身とみられる）が、農民たちから離れて都会の孤独な生活を送るところから、賢治の挫折感、哀感を表わした作品とみられているようである。「羅須地人協会の構想に破綻をみた」賢治の「甘美な空想」²¹⁾という評価もある。

しかし、はたして「ポラーノの広場」は傍観者賢治の夢にすぎないのであろうか。1931年ごろ手入れされたとみられる「ポラーノの広場」は、きわめて現実的な産業組合の「成功」を書き加えるかたちで成立している²²⁾。そして同じころらいてうは恐慌下の生活危機の現実と直面して「協同組合組織による病院の設立」を訴える文章を書いた²³⁾。これもまた、それまでらいてうが口にしてきたクロボトキンの相互扶助論を下敷きにした「協同自治社会構想」からみるとはるかに現実的である。この「現実性への転換」をどうみるべきかが小論の検討課題となるだろう。

このことを明らかにするために、らいてうと賢治が共有した1920年代から30年代はじめの時期

にそれぞれがどのような社会構想を形成していったかをさぐってみたい。

Ⅱ 1921年のらいてうと賢治

賢治は、父との葛藤の末1921年1月家出、東京上野の国柱会を訪ねて「下足番でもビラ張りでも何でも致しますからこちらでお使ひ下さいますまいか」と頼み、断られる²⁴⁾。しかしこの時面会した高知尾智耀に「法華文学」をすすめられてガリ版切りのアルバイトをしながら「1カ月に三千枚といわれる童話原稿を書いたという。友人の保阪嘉内に熱烈な入信勧誘の手紙を送りつけ、ついに袂別の原因をつくったのもこの時期である²⁵⁾。

しかし、この出京は妹トシの発病によって終わりを告げる。帰郷して稗貫農学校（のちの花巻農学校）教諭となった賢治が、その年の12月21日に書いたのが「鳥の北斗七星」である。生前唯一刊行された童話集『注文の多い料理店』に収録され、したがって読者の目にふれる機会を持ったこの童話は、「あしたの戦でわたくしが勝つことがいいのか、山鳥がかつのがいいのかそれはわたくしにはわかりません」という戦争への疑問を内包し、しかも「どうか憎むことのできない敵を殺さないでいいやうに早くこの世界がなりますやうに」という平和への祈りの美しさを持つことによって知られている作品である。だが同時にこの作品は、どちらが正しいかわからない戦争に「わたくしはわたくしにきまったやうに力いっぱいたたかひます」としたところから波紋を呼ぶ。戦時中自らの意に反して戦場へ送られた学徒兵佐々木八郎が自分は何のために戦場へ赴くのかと問い、それが運命であるならば「お互いに生まれもった運命を背に担いつつ、お互いに夫々きまったやうに力いっぱい働き、力いっぱい戦おうではないか」²⁶⁾という論理を支えるものとして使われたことによって、戦後論議的にもなった。戦争体験世代の小沢俊郎は、「自己を捨てまことの皆の幸福の為に尽したつもりで客観的にはその行為が本人の意図と逆になることがあり得る悲劇」に言及し、このモチーフを賢治の「良心的な失敗」²⁷⁾と呼んだ。ここに国柱会の影響下にあった賢治の「救済」理念のあいまいさをみることは容易である。

だが、「烏の北斗七星」は、べつなとらえかたもできるのではないだろうか。それは、この作品が佐々木八郎の生きた太平洋戦争の時代ではなく、文字どおり帝国主義列強の世界分割戦争としての第一次世界大戦の時代に書かれたということである。ヨーロッパは無差別の戦場となり、「外人部隊」も登場、毒ガスなどの化学兵器等によって、非戦闘員を含む大量殺りくがくりひろげられた戦争であった。戦後人びとは平和を渴望し、国際連盟が成立する。第一次世界大戦中のロシア革命によって地球上最初の社会主義国家が成立し、インターナショナリズムの立場から「無賠償・無併合」の原則をかかげたことも、当時の戦争をかならず国家的利益とむすびつけるナショナリズムへの批判を生むきっかけであった。「烏の北斗七星」は、このようにインターナショナルな平和主義を求める時代風潮のなかで書かれたのである。烏の大尉は、たしかにここでは侵入者の山鳥に対して戦いを挑む義勇戦士であるが、侵入者を追い払ったことに、もはや誇りを持ち得ず「憎むことのできない敵を殺さないでいいやうに」と祈らずにはいられない。ここに第一次大戦後の平和主義思想の一つの特徴を見ることができよう。それは「国境」「国家」の壁を越えた平和構想を生み出してゆく。しばらく後に賢治が熱中するエスペラントもこの流れのなかで広まるのである。

賢治が岩手県花巻の「土着的知識人」であったことは事実だが、ハイカラで東京にあこがれる賢治自身には、「国家」や「郷土」といった意識はうすかったとみてよいのではないだろうか。盛岡高等農林在学中に発行した同人誌『アザリア』に、彼の「旅人のはなし」という作品がある。「旅人」はじつは「生存競争などと申す様なつまらない競争もなく労働者対資本家などといふ様な頭の病める問題もなく総てが楽しみ総てが悦び総てが真であり善である」といういわば理想の王国の王子なのであるが、そのことを知らなかった時はもちろん、父なる王と出会い、この国は王子のためにつくられたものであることを知ったのちもなお「永い旅」をつづけるのである。おそらくその理想の王国は国境によって区切られた国家のかたちをとっていないのであろう²⁸⁾。「旅人」は自らの王国にもいないし、さまざまな国を、はてしなく旅する存在なのである。

このようにみてくると、「烏の北斗七星」が書かれたのと同じ1921年に、平塚らいてうが書いた「軍備縮小問題」という文章が連想される。らいてうはここで、第一次大戦後国際連盟が成立したにもかかわらず、世界世論としての軍縮が国家的利害の壁に阻まれて前進しないことを批判、「何故全人類が要求していることが、そして今や動かしがたき世界的輿論となっていることが、実際問題として現実の国家の上に行おうとする時こうも多くの困難に遭遇せねばならないのでしょうか。もしそうだとすれば国家というものは少なくとも現実の国家は我々人類の敵だと言われはしないでしょうか」と書く。「人類がもっているどんな高遠な理想も尊敬すべき思想も一度国家の手に、政府者の手に移されると同時に政策化し、国家的利己心の前に、あるいは是とされ、あるいは非とされねばならぬ」ことの不快さをらいてうは隠さない。そしてらいてうに言わせると「私もは或る定められた国の国民であると共に、常に世界民であり、宇宙民であります」と自己規定するのである²⁹⁾。

「世界民」「宇宙民」という発想を、らいてうはどこから得てきたのだろうか。らいてうも女子大在学中から参禅し、見性体験を経て自己の内に宇宙を観る体験を持っている。しかし、軍備縮小問題で国家的利害の壁を批判する論調は、たんに観念としての宇宙ではなく、国家的利害——国境を止揚した宇宙という世界構想をはらんでいるのである。じっさいらいてうは1920年代後半から30年代はじめに無政府主義に強くひきつけられ、高群逸枝とともに「無産婦人芸術連盟」に参加している³⁰⁾。らいてうだけではない。母性保護論争でらいてうの論敵であった与謝野晶子も自らの理想社会構想として、「私たちは個人として、国民として、世界人としてという三つの面を持ちながら、それが一体であるという生活を意識的に実現したい」と主張し、「国民と国民、国家と国家の名に由って軍事上、政治上にのみ同盟し扶助し合っていることは、結局、世界の上に二大強国、もしくは三大強国を作り、それらが互に対峙しいがみ合って世界人類の平和と個人の平和とを破ることになります」³¹⁾と書く。彼女の理想は「人類無階級的連帯責任主義」の上に立って、すべての人間(男女ともに)が額に汗して働く「汎労働主

義」の社会をつくることなのであった³²⁾。

こうした流れのなかに賢治を置いてみれば、彼が国柱会の影響を受け、その「国体主義」の教義を容認していたことは事実であるにしても、大きな国際的動向と国内の論調から切り離された国家主義的世界観のなかにいたとはいえないのではないだろうか。問題は、このようないわば「国境」を越えた「宇宙民」「世界民」構想が、日本の現実とどこでむすびつくかであった。ここでクローズアップされるのが賢治が労農党に接近し、らいてうが「無政政支持」をよびかけた時期である。

Ⅲ 1927年のらいてうと賢治

賢治が、普通選挙法成立に伴い合法無産政党として1926年に創立された無産政党左派の労農党稗和支部とかかわりがあり、表面には出なかったが、さまざまな支援活動をしたことは名須川溢男の労作とともに今ではよく知られている³³⁾。そこに登場する証言者たちによれば、賢治は労農党の支部事務所に自分の本家の長屋をあっせんし、家賃もカンパしたという。彼が羅須地人協会で教材印刷に使用した謄写版もここに寄付された。『宮沢家などは長いことはありませんよ。土地は農民に返さないといけません』といつでもいっていました」という証言もある³⁴⁾。この時期に書かれた詩のなかにも「きみたちがみんな労農党になってから／それからほんとおれの仕事ははじまるのだ」³⁵⁾ (1927. 3. 26)「牢獄につながれたたくさんの革命家や／不遇に了へた多くの芸術家／これら近代的な英雄たち……」³⁶⁾ (1927. 5. 9)「真摯なる労農党の委員諸氏」³⁷⁾ (1927. 8. 16)「新たな時代のマルクスよ」³⁸⁾ (「生徒諸君に寄せる」より)といった語句がしばしば登場する。また当時の蔵書リストをみても、マルクスの『資本論』、ブハーリンの『唯物史観』などがあり³⁹⁾、レーニンの『国家と革命』を読んだという証言もある(後述)。

ところで、らいてうが全く同じ時期に、つまり第1回普選を控えた1927年から28年にかけて、婦人参政権の獲得をめざす婦人団体に対して、しきりに無産政党支持をよびかけているのは偶然の一致であろうか。らいてうは1920年に新婦人協会を設立、婦人参政権獲得運動をはじめが、1925年成立した普通選挙法は男子のみのもので、

女性は無視された。それでもその普選による第1回総選挙を前に、らいてうはこれまで婦人参政権を否定し「婦人に対する相変らずの封建的思想の持ち主でしかない」既成政党よりも「普選の徹底」を政策にかかげる無産政党の動向に関心をしめす⁴⁰⁾。それは、婦人参政権の要求をかかげて保守系の議員訪問をくり返し、その無理解に直面した新婦人協会当時の苦い体験にもとづいていた。今新しく誕生した無産政党(労農党・日労党・社民党)に対し、らいてうは「種々な不満をあげようと思えばあげられない」としながら、「婦人参政権をその重要な政策の一つとする」無産政党とむすびつきを持つべきであり、既成政党とのみかかわってきた運動方法」を捨ててもいい時代ではないかと提唱する⁴¹⁾。総選挙直前の1928年2月6日は「婦選運動者へ——全婦人団体よ、婦選をその綱領に掲げた無産政党を応援せよ」と題するアピールを放っているのである⁴²⁾。そこでらいてうは婦選獲得同盟をはじめとする婦選団体が無産政党と提携しようとせず、旧来の既成政党のなかの個々の代議士の応援にとどまっていることを「不純」「不徹底」「義理だて」と非難、「今日の議会において何といっても多数の議席を占める点において力である既成政党の手にすがって」婦人参政権実現をはかろうとする小細工にすぎないと述べている。らいてうのこのよびかけは、たんに無産政党が婦選要求をかかげているからという理由だけではなかった。むしろ今後の婦選運動を「階級的立場からするか、超階級的立場から——すなわち階級的対立を無視し、性的対立のみを認める立場からするか」の選択の問題だというのである⁴³⁾。

らいてうは、今や社会主義を支持し、階級闘争による社会変革を期待する立場に移行したのであろうか。たしかに彼女は知識婦人の生活にふれて女性の権利要求が「彼女らの心の中にもついに階級的意識をよびさまし」たことに注目、「かつての彼女らが、男性に向けた反感や反抗的気分は今や今日の資本主義制度に、資本家階級に転ぜられ、さらに無産階級の台頭とその解放運動に共鳴と感激を呼び起こし、他方その指導原理たる社会主義思想に啓蒙されつつある」⁴⁴⁾ことを確信ありげに書いている。

1927年から28年2月総選挙までの無産政党の

動向をめぐるらいてうと賢治のこの高揚した気分を知る時、そこには二つの認識が生まれる。一つは、日本ではじめて合法的な無産政党が選挙をたたかい、たとえ女性も排除されているにせよ、これまで投票さえできなかった無産者が政治行動を起こし得るということへの熱い期待である。そして推定ではあるがほぼこの時期に賢治の「ポラーノの広場」は、牧歌的あるいは幻想的な「ポランの広場」から、山猫博士の横暴とたたかって自給自足的な生活共同体をつくり出そうとする若者フェゼーロたちの物語（第一次稿）へと書き改められるのである⁴⁵⁾。そこでは賢治の分身ともみられるキューストは、若者たちを見守りつつ「ほんたうのポラーノの広場」をさがし求めるフェゼーロたちが、「ほんたうにぼくらのほしいポラーノの広場」は「いまぼくらの胸のなかにあるだけだ。ぼくらはぼくらの手でこれからそれをこしらえやうではないか」と語るとき、思わずはねあがって「風からも光る雲からも諸君にはあたらしい力が来る」と叫ぶ。この作品は、キューストが「諸君、あたらしい時代はもう来たのだ……ぼくももうきみらの仲間にはいらうかなあ」と口走り、あわてて「いや、わたしははいらないよ。はいれないよ」とためらうところから、かつて「農民芸術概論綱要」で「おれたちはみな農民である」とうたいあげた賢治が、羅須地人協会の活動を経験してじっさいには農民たりえない挫折を味わったことの表現ともうけとれ、「郷愁と哀感」⁴⁶⁾と評されることになるのであろう。しかしもし1928年はじめまでの賢治のあの労農党への尊敬をこめた期待とはほぼ同じ時期にこれが書かれているとすれば、そこにはむしろ働くものが自らの手で自分たちの未来をつくり出そうとしていることへの信頼が流れているとみることができるのではないだろうか。

だが、こうした高揚は、早い時期に冷えてゆく。賢治のばあいそのきっかけに、花巻で羅須地人協会の活動が社会主義教育と疑われ、警察に事情聴取されたこと、1928年4月、労農党が解散させられたことなどがあったことは事実であろう。その年の6月、上京した賢治は「ひかりかがやく青ぞらのした／労農党は解散される」（1928. 6. 10）⁴⁷⁾とうたう。ショックは大きかったにちがいない。同時に賢治が、『国家と革命』を読んだが、「これはダメですね。日本に帰ってこの思想によ

る革命は起らない」⁴⁸⁾と言ったこと、あるいは「ポラーノの広場」でも県会議員で工場主の山猫博士ことデステッパーゴの悪役ぶりはくわしくえがかれるのに、地主テモははっきりした位置づけを与えられていないことからうかがえるように、日本の農村にとって最大の矛盾である地主小作関係に踏みこんでいないこと⁴⁹⁾など、賢治自身本気で労農党や社会主義の立場に立とうとする決意はなかったとみる評価も一般的である。

ところでらいてうもまた1928年の総選挙後、急激な思想的転換を遂げる。そのきっかけはクロボトキンとの出会いであった。らいてうは1927年に世田谷の成城に転居し、それから間もなく弁護士山崎今朝弥を通じて一人の青年を知る。その青年が東京共働社消費組合の活動家で、やがて成城に東京共働社の成城支部が結成され、らいてうはその創立から組合活動に参加するのである。それと前後してらいてうはクロボトキンの『相互扶助論』を読み、その「協同自治社会」の構想に深く共鳴する⁵⁰⁾。らいてう自身の解説によれば近代における人類は、三つの大きな発見をしたという。「その第一は個人の発見であり、第二は階級の発見であり、第三は協同社会の発見」⁵¹⁾だというのである。人類の本能のなかにある協同心、すなわち相互扶助本能を社会構想にまで高めたのが、ロッチデール主義による協同組合なのだ、とらいてうはいう。そしてその協同組合主義は、マルクス主義の階級闘争主義と異なり「階級意識の上に立ってはいても、争闘によらずもっぱら女性の掌中にある最も日常身近な台所の消費生活を相互扶助の精神により協同の基礎の上に建て直す」⁵²⁾というもので、革命ではなく平和的かつ具体的な方法で資本主義の経済組織を切りくずしてゆくことができる。とらいてうは考えた。なぜなら、消費組合をはじめとする協同組合は「儲けない」つまり「利潤もなく、搾取もない協同の社会」⁵³⁾をめざすものだから、というのである。

らいてうは、これを都市中産階級の主婦層による理想社会建設の構想として提起した。しかし、もう一度賢治の「ポラーノの広場」に戻ってみるならば、農村（但し地主制を基礎とする日本農村とはイメージがちがうが）の搾取や利潤追求主義から解放された少年たちの自給自足的共同体の構想は、らいてうのえがく理想社会にしだいに近づ

いているように思われる。羅須地人協会の行きづまり、労農党支援をめぐる矛盾、労農党解散、発病などの困難に見舞われながら、賢治が「ポラーノの広場」に託そうした理想が「協同組合主義」という視点からみえてくるのではないだろうか。ただし、賢治もそうであったようにこの協同組合思想は階級闘争の立場とは異なる。らいてうの場合はもっとはっきり「反ソビエト主義」「反共産主義」の色彩を持っていた。賢治が日本では革命は起こらないと言った同じ時期に、らいてうも反共主義をあらわにする⁵⁴⁾。ここにはもうかつてのような無産政党への熱い共感はなく、むしろ「婦人非政党同盟」⁵⁵⁾への共鳴という主張が顔を出すのである。

1928年の労農党解散から30年にかけてのらいてうと賢治の足どりは、おおよそ以上のようなものであった。だが、「協同組合主義」ははたして現実の社会をよりよいものにしてゆくうえで有効性を持っているのだろうか。筆者はかつてらいてうの協同組合論に対し、「現存する社会秩序をどのように変革することによって理想社会を実現するのかというプログラムが欠けている」⁵⁶⁾と批判した。「ポラーノの広場」にもまた「絵空事」⁵⁷⁾めいているという批判がある。では、このプログラムもまた挫折するのだろうか。その問いへの答えをさぐるために、大恐慌下の1931年のらいてうと賢治の言説に注目してみよう。

IV 1931年のらいてうと賢治

1930年から日本は世界恐慌の渦の中にあった。農産物価格は暴落し、東北地方は31年の冷害も加わって「娘身売り」「欠食児童」が続出した。この農村困窮の最中に、賢治は東北砕石工場技師として、病み上がりの身をもって炭酸石灰の普及販売活動をはじめ。工場主鈴木東蔵には、賢治の父からかなり多額の資金が提供され、賢治もまた農学校時代の給料よりはるかに少なくしかも現物支給という条件で、いわばセールスマンになるのである。賢治のこの仕事への打ち込みかたはなみ大ていのものではなく、結局この仕事の過労も彼の命取りの一因となるのだが、それにしても賢治はなぜこれほどにこの仕事に熱中したのだろうか。もちろん、羅須地人協会の挫折後の新しい仕

事への期待、賢治が生涯の仕事とした肥料設計にかかわる仕事、父の後押しなどいくつかの要素があることは事実である。しかし、それにしても、この時期の書簡や詩にのこされている無茶としかいいようのないセールス活動に賢治を突入させたものは、いったい何だったのだろうか。賢治のセールスはなかなか成功しない。「大曲よりやけくそに各組合及農会を歩き」(1931. 4. 22)「昨日は横黒線廻りを致し候処……一車をも得ず空しく帰花」(1931. 4. 29)「十二時十五分当駅(厨川駅のこと)に下車して種馬所と育成所を訪ひ申候処両処共矢張本年は予算なくして碌に肥料も買はざりし由」(1931. 6. 4)「遂に注文としては一車をも得ざりし訳に御座候」(1931. 7. 3)……。⁵⁸⁾そしてようやく生産量が拡大すればしたで営利活動の一端を担っているがゆえの「あらたなる／よきみちを得しといふことは／ただあらたなる／なやみのみちを得しといふのみ」⁵⁹⁾という矛盾。

それでも賢治がこの仕事を辞めようとせず、むしろ倒れるまで走りまわった理由の一つを、この時期に手入れがおこなわれたと推察される「ポラーノの広場」の改定稿にさぐることができるのではないだろうか。この作品の改定稿はさきにふれた部分——つまり自分たちであたらしいポラーノの広場をつくろうという若者たちの熱っぽい呼びかけや、それに答えてキューストが熱弁をふるう部分はすべてカットされ、代ってキューストが去った後、ファゼーロたちは「立派な一つの産業組合」をつくり、「ハムと皮類と醋酸とオートミル」をモリーオ市やセングード市へ広く出荷するのに成功したというくだりがつけ加えられたのが大きな変化である⁶⁰⁾。羅須地人協会の理想に燃えていた時の賢治がこの作品のなかでキューストに語らせた「野原の富を三倍にする」ような未来イメージは恐慌のただなかである1931年の時点でカットされている。

現実はそのような希望を持てる状況ではなかったのである。しかし、そこで、あえて若者たちの産業組合の成功がつけ加えられたのはなぜか。それも「ハムと皮類と醋酸とオートミル」だという。あの名作「フランドン農学校の豚」を書き、極端なまでにベジタリアンであった賢治が「ハムと皮類」を売り出す産業組合をなぜ書き入れたのか。産業組合とはそもそも何か——。

一般に産業組合といえば、1900年の産業組合法によって育成された農村を中心とする協同組合という理解がある。戦後改組されたが、それでも現在の農業協同組合の前身というイメージがあてはまるのではないか。1930年代に産業組合中央会に在職していた丸岡秀子は、「明治政府は、コオペラチーブを協同組合と呼ぶのを嫌い、それも市民運動や労働者運動のなかでとらえられるのを避けて、アグリカルチュラル・コオペラチーブとして、日本農業の『殖産・振興』の面でとらえようとしたんですね。それで労働者運動のなかで生まれたロッチデールを避け、ドイツのラムファイゼンなどの農業協同組合運動に範をとり、『協同組合』でなく、『産業組合』として日本に輸入したものです⁶¹⁾と説明している。

この説明からもうかがえるように、日本の産業組合政策ははじめから農業・農民団体を上から育成するために導入され、特に第一次大戦後の小作争議の激増、日本農民組合の創立(1922年)という事態への対応策として推進されてきたのであり、「政治的発言力を有する地主による、みずからの階級的利益を守る立場⁶²⁾から組織されてきたものである。したがって第一次大戦後昭和恐慌に至る1920年代を通じて産業組合に期待されていたのは「階級闘争の必然性を未然に防ぎ共存共栄の実をあげ⁶³⁾」ることであった。

このような産業組合の性格は、1932年の「産業組合拡充五ヶ年計画」の開始以後いっそう強化され、「産業組合そのものがファシズムの農村での社会的基盤⁶⁴⁾」となっていくとみるのが一般的な評価である。そして1926年から27年にかけて賢治が支持したとされる労農党は、こうした「上からの」農民組織化に反対し、小作農民の生活擁護を要求する方針を持っていたことはいまでもない。

では、労農党支持から「ポラーノの広場」を改作し、産業組合への期待に転換した賢治は、やはり農村での「野原の富を三倍にする」ような希望を見失い、体制への批判を放棄したのであろうか。もしそうだとするともし賢治が生きていたらこの後の時期の石原莞爾や農本主義者たちと同じような道を歩いたかもしれないという仮説が説得力をもってよみがえってくることになるのである。そして、らいてうの「協同自治社会」構想にも同じ

ような矛盾がうまれていたとみることになるのではないだろうか。

しかし、ここで見落としてはならないのは、昭和恐慌という未曾有の生活危機に直面した時期にあって政治的な体制批判一般ではなく、現実には人びとの生活をすこしでも崩壊の危機から守ろうとする運動が都市でも農村でもくりひろげられていたという事実である。そのなかで、産業組合もまた、階級矛盾緩和のための上からの組織化という枠組みだけではとらえられない役割を担った時期があり、その時期こそ賢治が「ポラーノの広場」を書き改め、らいてうが「協同組合」を熱っぽく説いた1931年を中心とするわずか2～3年の間であった。このことがらいてうと賢治を考えるうえに大きな意味を持つと思われるのである。

具体的に考察してみたい。もともと産業組合は、販売、購買、信用、利用という四つの機能を持つとされ、なかでも信用組合は、地主・富農層から集めた資金を国家が集約し、国家資金と合流させたうえで産業組合や組合員に融資するという「国家権力に結合・依存する形⁶⁵⁾」をとるものであったとされる。購買機能で最大の問題となった肥料購入については、作付けの時期に農民に肥料を提供し、収穫時まで代金を貸しつけて高利をとり立てる肥料商人の存在を排除する役割をはたしたとされ、このため都市小ブルジョアである肥料商を中心に、「反産業組合運動」が起こる⁶⁶⁾。それは一面では強力な国家的統制による中小業者排除に抵抗する「反権力闘争⁶⁷⁾」の意味を持ったという評価がある一方、他方では肥料商の排除が「農民に対する商人・金融資本の制圧を緩和⁶⁸⁾」した側面を認める見解もある。地主・肥料商の「過度な農民搾取」が「農民をつねに貧困にとどまらしめた⁶⁹⁾」という指摘もある。

このように1930年前後の産業組合は、複雑な要素をはらんでいたのであるが、昭和恐慌に直面し、労働者や農民の運動が弾圧される1930年代には、この産業組合をめぐる新しい動きが起こっている。そのひとつが、ほかならぬ岩手県で30年代初頭にひろがった医療組合の運動であった。すなわち産業組合の一業種としての利用組合のかたちをとった、医療施設設立運動である⁷⁰⁾。

無医村を多く抱える岩手県では、1930年に矢作産業組合が、31年には奥玉産業組合がいずれ

も利用施設としての診療所を開始している。しかし小規模の赤字経営が続いていた。そこで一村単位ではなく広い地域から組合員を募り、その組合員の出資によって医療利用だけを目的とする組合をつくろうとする動きが全国的に起こったという。1928年には青森、29年高知、30年鳥取と続き、1931年5月には東京医療利用組合が創立される。組合長は岩手県出身で当時産業組合岩手支会長の新渡戸稲造、専務理事賀川豊彦であった。「医療組合員が経営の主体であると同時に組合員たる患者自身が当然監督者たらんとする……自主的立場」と「産業組合が母胎として凡ゆる後援を吝しまぬ」安定性が注目され、日本医師会の反対を押しきって認可されたという。

岩手県では、賀川豊彦が盛岡で講演するなどの動きに影響を受け、医療利用組合の設立運動がひろがる。1933年盛岡市、岩手郡、紫波郡を区域とする医療利用組合盛岡病院、1934年には彦部村、さらに平館村、志和村など、3年間に県下で10カ所をかぞえたという。岩手の医療運動はこの後も全県的に広がり、戦後沢内村のような「自分たちで生命を守った村」を生み出す土台をきづいたのであるが、その出発点は産業組合だったのである。

この時期に産業組合中央会にいた丸岡秀子は1937年『日本農村婦人問題』を刊行するが、そこで彼女は信用、販売など地主・上層自作中心の産業組合に女性はほとんど組織されていないことを指摘しつつ、「数は少ないが、共同耕作、産婆、託児所等の生産農民の要求に切実に結び付いたところの恒常性を持った事業」に注目、中小貧農の産業組合参加による大衆化と、その傘下の婦人団体の大衆化によって、上記のような事業がおこなわれることは、「男性中心の家父長的家族制度の圧迫下にある婦人」の問題を社会的に解決する方向にむかう可能性を持っていることを、「農村産業組合婦人組織の将来には大きな分野が展けている」と表現している⁷¹⁾。

この事実は、産業組合自体は国策型であったにせよ、一定の条件のもとで自主的な生活擁護要求の実現という役割を担い得ることをしめしているのではないだろうか。そして、1931年にらいてうが高く評価した「協同組合組織による病院の設立」とは、まさに岩手の運動に影響を与えた新渡

戸・賀川らの東京医療利用組合のことであった。彼女は、「何も政府の手をまたなくても、わたくしたち民衆自身の手で、その協同の力で『我らの病院』を自主的に経営することによって現在の医療制度の社会的欠陥は最も早く除かれるでしょう」と期待する。そしてそれは、他の協同組合運動とあいまって「新社会建設の基礎的工事として有意義」と考える⁷²⁾。彼女はその可能性を、自ら創立した消費組合「我らの家」に求めて組合活動をつづけるのである。

産業組合を「上からの」組織化ではなく、「下から」民衆的な立場に立って農民自身の生活を守る場として組織しようとした例は、全国に散在している。鳥取県箕蚊屋地方で大正期以来農民組合の指導者として小作争議の先頭に立ち、1928年3月、3・15事件で逮捕された大山初太郎は、1931年11月に仮出獄した後、1932年に産業組合をつくり「自作農創設」の事業をはじめめる。自創事業というのも国策で、小作争議を鎮静させるための資金供与であるから、これまで農民組合側はむしろ反対していたのである。しかし小作争議に対するきびしい弾圧と、恐慌下の生活破壊の現実のなかで、大山は「ただ争議さえおこせばすむというものではない」と考え、「別のしかたで農民の生活防衛をはかる」必要にせまられたのだという⁷³⁾。また山形県黄金村では1929年に信用購買組合としての恒義会が発足するが、1933年以降は販売も取り扱うようになり、一部小作層も含めて「恐慌下でありながらも小商品生産者的前進・上向をはかろうとする農民層の内発的要求」が産組組織化の起動力になったという⁷⁴⁾。

ここで、晩年の賢治が熱中した東北碎石工場の活動を思い起こしてみたい。彼は商品としての石灰を販売するために、東北各県下の農事試験場や農会・肥料商店などを訪問しているが、そのなかには「県購連組合・産業組合」と記されているものも少なくない⁷⁵⁾。その訪問先で賢治が何をみたかはどこにも書かれていないが、彼が産業組合を知る機会があったとみてよいのではないか。さらに東北碎石工場主の鈴木東蔵は、賢治自身によって「割合に廉潔な直情な男で自治体に関する小著等もありまうけばかりを夢見る我利我利亡者でない点甚私とも共鳴する次第」⁷⁶⁾と書かれた人物で、その「小著」とは『農村救済理論と実際』(1916

年刊)、『理想郷の創造』(1921年刊)である⁷⁷⁾。前者に序文を寄せている農学博士佐藤寛次は、1927年に「東北振興と産業組合」と題する講演で「産業組合は人間の米の飯だ」と語り、信用組合についても「平民的にやってくる銀行」「デモクラチックとか民衆主義」と説明している。医療組合についても島根県の例をあげて「此村の産業組合の力に依りまして産婆を置いて、出産に間違いの起らないやうに組合が注意をして居る」とも述べているのである⁷⁸⁾。これは文字どおり国策宣伝の立場にちがいないが、鈴木東蔵がえがく「理想郷」と共通するイメージだったのではないだろうか。賢治がほとんど報酬も保障されない過酷なセールス活動に熱中した背景には、このような「理想」への共鳴があったかもしれない、と考えさせられる。そして、「ポラーノの広場」は東北砕石工場とのかかわりが深まる過程で書きあらためたと思われるのである。またさらに、「ポラーノの広場」の少年たちの産業組合が「ハムと皮類と酢酸とオートミル」を出荷することについて疑問を提出したが、たとえば組合員の生産物販売を目的とする販売組合について、次のような記述がある。すなわち「……農村工業の理想は、販売組合の加工によって達成し得ることの極めて多きことを知らなければならぬ。……総じて本県(岩手県のこと)の産業は単に物の原始的生産にのみ傾き易く、加工不振の憾が少なくはない。……由來米麦と養蚕に偏重の傾向にあると称せられる本県の農業は、畑作に尙一段の工夫を凝らし、トマト、グリーンピース、アスパラガスの加工(壺詰、罐詰)にも進出すべきではあるまいか。豚肉に於けるハム、ソーセージ、兔肉の罐詰、牛乳を処理してクリームやバターを得るなど何れも加工販売の適例である。ホームスパンの染色、仕上げ、製織亦然り」⁷⁹⁾。この文章が当時の東北農村の実情をどれだけ踏まえたものかはともかく、ここにえがかれる産業組合像は、トマトをつくりチューリップを咲かせ、「農民服の研究」と称してルパシカや皮ぼうしの研究製作まで考えていたという羅須地人会のイメージと、奇妙に似かよっている⁸⁰⁾。賢治にはそぐわないように見える「ハム」づくりも、産業組合によって小商品生産者として上昇——つまり生活改善を求める構想のなかから言及された可能性があるといえないだろうか。

賢治が、羅須地人協会の実践に挫折しつつ、なお産業組合の活動と構想にひきつけられて「ポラーノの広場」の改定稿を書いたという仮説が成立するとしたら、そのことはどのように評価されるべきだろうか。小作争議の指導者大山初太郎が故郷鳥取県で産業組合を組織し、自作農創設運動をはじめた時、農民運動の同志から「土地革命をめざす農民運動の邪道である」と非難された⁸¹⁾。賢治もさきにつれたようにレーニンの思想では日本に革命は起こらないと言ったという。しかし、労農党解散、労働者農民運動への弾圧、そして凶作と恐慌にあえぐ農村とそこで生きる農民たちを見捨てることのできなかった賢治が産業組合という「協同組合」に期待を抱いたとしても、それは権力への迎合、と切り捨てるわけにはゆかないだろう。たしかにそれは「土地革命」の思想を欠くものであり、現実の矛盾を回避するものであったかもしれないが、一方で言えば体制の枠組みのなかでも生活を向上させなければならないという願望のあらわれとみることができるのではないだろうか。1931年から33年にかけての時期は都市でも階級闘争の先頭に立ってきた無産運動のなかで、いっせいに「自主的生活擁護」の運動がひろがる。医療利用組合とは異なる立場からではあるが、健康保険制度さえ整っていない現実のもとで、「我々の病気を治すためには、我々自身の病院を持たねばならぬ」として起こされたのが無産者診療所運動であり、階級的消費組合と自負する関東消費組合連盟が、失業者や欠食児童が続出する恐慌下の東京で、「議会請願などは右翼日和見」という批判を乗り越えて安い政府米の払い下げを請願するという「米よこせ運動」にとりくんだのもこの時である。宮本百合子の小説『乳房』の舞台となった無産者託児所も、これまでの託児所政策の恩恵的性格を批判しつつ、たんに政策批判にとどまるのではなく「無産者の共同責任」として「我々の子供は我々で守ろう」という姿勢からはじまったものである⁸²⁾。

以上のような1930年代初頭の情勢を検討してみるならば、らいてうと賢治がともにたどりついた「協同」のイメージは、決してたんなる空想であったり、社会の現実からかけ離れた観念ではなかったといえるのではないだろうか。あの1921年の時点で「憎むことのできない敵を殺さないで

いいやうに」と祈った賢治、「世界民」「宇宙民」としての人類観を持ったらいてうは、ともに一度は日本の現実変革を求める無産政党に共感する。しかし、「階級闘争」や「革命」に懐疑を抱いた両者が恐慌下の生活危機のなかで1931年に期せずしてたどりついたのが、「協同組合」であり、「自主的生活擁護」であり、「相互扶助の自治社会」であったことは、「現実を見失った」のではなく、「現実に行き届くこと」の模索の結だったと考えたい。

む す び

1931年のらいてうと賢治の選択を以上のように位置づけた時、ではなぜ戦時下を生きたらいてうは、「皇国史観」にのめりこむような発言をしたのか？ という問いがのこる。この点についての一つの回答は、1938年「国家総動員法」の成立によって経済の国家統制強化必至の状況下、らいてうが10年にわたって支えてきた消費組合「我等の家」が、これまでブルジョア的として対立していた家庭購買組合に吸収合併されたことを指摘することができる。「協同組合」に拠って自主的な理想社会を、というらいてうの構想は、軍国主義とファシズム体制によって解体させられた。らいてうに今日「戦争協力」とか「体制容認」と批判されるような発言が目立つようになるのは、おおむねそれ以後、つまり日中戦争開始後に国民精神総動員運動が展開されてからのことである⁸³⁾。

産業組合もまた、恐慌の時期にいわば自主的な生活向上の場としての可能性を求める動きがあったとはいえ、1930年代後半にはそのような可能性は閉ざされていく。1937年日中戦争開始とともに展開される「国民精神総動員運動」がそれに拍車をかけた。このように産業組合に寄せる「協同」の希望は、ファシズム体制のなかにのみこまれていくのであるが、賢治は死の直前まで、産業組合についてその本来の「協同」の意味を持った期待を持ちつづけていたのではないだろうか。これもよく知られていることであるが、1933年9月、賢治は未発表のままになっていた詩集『春と修羅』第二集から「産業組合青年会」を詩誌『北方詩人』に提供する⁸⁴⁾。1924年10月4日の日付

があり、さらに発表前の改稿があるというこの詩は、「部落部落の小組合が／ハムをつくり羊毛を織り医薬を頒ち／村ごとの、また、その聯合の大きなものが／山地の肩をひととこ砕いて／石灰岩末の幾千車かを／酸えた野原にそそいだり／ゴムから靴を鋳たりもしよう」とうたい、「これら熱誠有為な村々の処士会同……」⁸⁵⁾という文言もみえる。これが活字になったのは没後の10月であった。彼がわざわざこの一篇を送ったいきさつを問う由もないが、偶然とは思えない。これも有名であるが、絶筆となった柳原昌悦あての1933年9月11日付書簡で「私のかういふ惨めな失敗」についてふれ、「いまにどこからかじぶんを所謂社会の高みへ引き上げに来るものがあるやうに思ひ、空想をのみ生活して却って完全な現在の生活をば味ふこともせず」といわば反省の弁を述べていること、「上のそらでなしに、しっかり落ちついて、一時の感激や興奮を避け、楽しめるものは楽しみ、苦しまなければならぬものは苦しんで生きて行きます」⁸⁶⁾と書いたことを、こうした流れのなかに置きなおしてみるならば、それは決してたんなる挫折感や敗北感ではなく、挫折のどん底から立ち上がり、もはや回復不能と思われる病いとたたかいつつ、現実とどのように向き合っていくべきかを問うメッセージとして発信されたと受けとることができるのではないだろうか。賢治がもし戦時中生きていたら、あるいはらいてうと同じような発言をすることはあり得たかもしれないが、その方向は国家主義・国体主義に向うものではなかったはずである。「天皇は生き通しの神」と書いたらいてうが、戦後も生きてえがいた理想社会は、非武装中立の平和な日本であり、国家の壁を越えた「世界連邦」構想であった⁸⁷⁾。その根底に1920年代以降の理想社会構想があったとすれば、国境を越えた平和思想、搾取のない平等な協同社会構想においてらいてうと共通性を持つ賢治にも、その可能性を見出すことは不自然ではないと思われる。そのような時代を共有したのが、1920-30年代のらいてうと賢治なのであった。

注

- 1) 吉田和明『宮沢賢治』（現代書館 1992年）81ページ。
- 2) 吉田 司「〈遊民〉のバーチャルランド」

- 『文学界』1996年9月号 257 ページ。
- 3) 近江幸正「ファシズムと仏教——国家主義思想としての日蓮主義——」中濃教篤編『講座日本近代と仏教6 戦時下の仏教』(図書刊行会 1977年) 137 ページ。
 - 4) 宮沢賢治書簡 1920年12月2日付保阪嘉内あて。ちくま文庫版『宮沢賢治全集』9巻 241 ページ(以下断わらない限り、宮沢賢治全集はちくま文庫版による)なお『全集』と略記。
 - 5) 同書簡 1920年7月22日付保阪嘉内あて。『全集』9巻 234 ページ。
 - 6) 梅原 猛「賢治と日蓮」『文学界』1996年9月号 246 ページ。
 - 7) 堀尾青史『年譜宮沢賢治伝』(原版 1966年 中公文庫版 1991年) 157 ページ。
 - 8) 上田 哲『宮沢賢治——その理想世界への道程』(明治書院 1985年) 75 ページ。
 - 9) 上田 哲「賢治研究ノオト抜書——『天業民報』賢治関係新資料紹介」『日本文学研究資料叢書 宮沢賢治Ⅱ』(有精堂 1983年) 37 ページ。
 - 10) 内藤正敏『遠野物語の原風景』(原版 1978年) ちくま文庫版 1994年 28 ページ。
 - 11) 宮沢賢治書簡 1933年8月30日付伊藤与蔵あて。『全集』9巻 590-1 ページ。
 - 12) 天沢退二郎『宮沢賢治の彼方へ』(思潮社 1987年) 97 ページ。なお、天沢のこの指摘についてはマロリ・フロムの反論がある(マロリ・フロム『宮沢賢治の理想』晶文社 1984年)。
 - 13) 中村 稔『宮沢賢治』(原版 1955年 筑摩書房版 1972年) 197 ページ。
 - 14) 谷川徹三「われはこれ塔たつるもの」(『世界』1973年1月号)があり、中村はこれに対し再反論している。(『文芸』1973年4月号)。前掲書 211-18 ページ。
 - 15) 山内 修『宮沢賢治』(河出書房新社 1989年) 206 ページ。
 - 16) 平塚らいてう「女性の感激」『読売新聞』1936年5月7日付『平塚らいてう著作集』6巻(大月書店 1984年) 123 ページ。なお以下『著作集』と略記。
 - 17) 米田佐代子「平塚らいてうの『戦争責任』論序説」(『歴史評論』1996年4月号) 参照。
 - 18) “未清算の過去”をどう清算するかについては、木下順二『“劇的”とは』(岩波新書 1995年)から多くのことを学んだ。
 - 19) マロリ・フロム『宮沢賢治の理想』(晶文社 1984年) 326 ページ。
 - 20) 「ポラーノの広場」の成立の経過については、天沢退二郎の見解に従った。それによればこの作品の一部はすでに1922年に書きはじめられ、幻想童話ふうの「ポラーノの広場」が1924年までに一応出来上がった後、「ポラーノの広場」(初期形)として改作されるのは「1927年頃」と思われ、さらに「1931年頃」黒インクによる手入れがおこなわれて現在のかたち(後期形)になったのではないかとされる(『全集』7巻の天沢退二郎による解説参照)。なお天沢は、講談社文庫版『銀河鉄道の夜／風の又三郎／ポラーノの広場ほか三編』の解説では、後期形の成立を堀尾青史の見解に拠って「どちらかといえば1930年」という立場を妥当としている。
 - 21) 中村 稔 前掲書 53 ページ。
 - 22) 天沢退二郎「本文について」『全集』7巻 573-83 ページ参照。
 - 23) 平塚らいてう「協同組合組織による病院の設立——医療制度の改革」(初出不明)『著作集』5巻 257-8 ページ。
 - 24) 宮沢賢治書簡 1921年1月30日付関徳弥あて。『全集』9巻 253 ページ。
 - 25) 宮沢賢治書簡 1921年1-7月の保阪嘉内あて。『全集』9巻 247-74 ページ参照。
 - 26) 日本戦没学生記念会編『きけわだつみのこえ』(岩波文庫 1982年) 145 ページ。
 - 27) 小沢俊郎『小沢俊郎宮沢賢治論集』(有精堂 1987年) 56-7 ページ。
 - 28) 宮沢賢治「『旅人のはなし』から」(『アザリア』第1号 大正6年7月発行)『全集』8巻 278-81 ページ。
 - 29) 平塚らいてう「軍備縮小問題——ハーディング氏の提議について」(『女性同盟』1921年8月号)『著作集』3巻 237-40 ページ。
 - 30) 平塚らいてう自伝『元始 女性は太陽であった』完結編(大月書店 1973年) 276-83 ページ。
 - 31) 与謝野晶子「三面一体の生活へ」(『太陽』

- 1918年1号) 岩波文庫版『与謝野晶子評論集』1985年 178-91 ページ。
- 32) 与謝野晶子「婦人改造の基礎的考察」(『改造』1919年4月号) 前掲『与謝野晶子評論集』262-76 ページ。
- 33) 名須川溢男「賢治と労農党」『新修宮沢賢治全集』別巻(筑摩書房 1980年)。なお、賢治と労農党とのかわりについては、強く支持していたとするみかたと、共感していたが傍観者的であったとするみかたとがある。
- 34) 森莊巳池『宮沢賢治の肖像』(津軽書房 1974年)
- 35) 「詩ノート」より1016番[黒つちからたつ]『全集』2巻 180 ページ。
- 36) 「詩ノート」より1063番[これらは素樸なアイヌ風の木柵であります]『全集』2巻 247 ページ。
- 37) 「詩ノート」より1086番「ダリヤ品評会席上」『全集』2巻 284 ページ。
- 38) 「詩ノート」付録「生徒諸君に寄せる」『全集』2巻 304 ページ。
- 39) 境 忠一『評伝宮沢賢治』(桜楓社 1975年) 438 ページ。
- 40) 平塚らいてう「無産政党と婦選運動」(『婦女新聞』1927年2月3日付)『著作集』4巻 273-4 ページ。
- 41) 平塚らいてう「転換期に立てる日本の婦人参政権運動」(『婦人之友』1927年4月号)『著作集』4巻 276-81 ページ。
- 42) 平塚らいてう「婦選運動者へ——全婦人団体よ、婦選をその綱領に掲げたる無産政党を応援せよ」(『東京日日新聞』1928年2月6日付)『著作集』5巻 20-27 ページ。
- 43) 平塚らいてう「婦選運動をいかに導くか」(『婦人公論』1928年7月号)『著作集』5巻 54-61 ページ。
- 44) 平塚らいてう「知識婦人についての考察」(『女人芸術』1928年8月号)『著作集』5巻 46-53 ページ。
- 45) 前掲天沢退二郎解説参照。
- 46) 前掲天沢退二郎解説『全集』7巻 613 ページ。
- 47) 「高架線」(「東京」より)『全集』3巻 414 ページ。
- 48) 名須川溢男「宮沢賢治とその時代」『岩手史学研究』55号 1970年)。
- 49) 中村 稔 前掲書 39 ページ。
- 50) 平塚らいてう自伝『元始女性は太陽であった』完結編 264 ページ。
- 51) 平塚らいてう「本能としての協同心の発展」(初出不明 1930年)『著作集』5巻 227-35 ページ。
- 52) 平塚らいてう「婦人戦線に参加して」(『婦人戦線』1930年4月号)『著作集』5巻 173-82 ページ。
- 53) 平塚らいてう「儲けない商売——消費組合について」(『女性新聞』74号 1930年9月20日)『著作集』5巻 218-20 ページ。
- 54) この点については、米田佐代子『著作集』5巻の「解説」参照。
- 55) 平塚らいてう「婦選時代の日本婦人」(初出不明)『著作集』5巻 156 ページ。
- 56) 米田佐代子前掲『著作集』5巻「解説」414 ページ。
- 57) 中村 稔 前掲書 53 ページ。
- 58) 以上は、いずれも賢治の鈴木東蔵あて書簡(『全集』9巻所収)による。
- 59) 「王冠印手帳」43-44 ページ。『全集』10巻 243 ページ。
- 60) 天沢退二郎による「校異」前掲 講談社文庫 337-43 ページ。
- 61) 『歴史評論』編集部編『近代日本女性史への証言——山川菊栄／市川房江／丸岡秀子／帯刀貞代』(ドメス出版1979年) 138 ページ。
- 62) 暉峻衆三『日本農業問題の展開』上(東大出版会 1970年) 293 ページ。
- 63) 産業組合中央会「産業組合と小作問題に関する調査」1928年(暉峻前掲書より引用)。
- 64) 大江志乃夫編『日本ファシズムの形成と農村』(校倉書房 1978年) 287 ページ。
- 65) 暉峻前掲書 312 ページ。
- 66) 山下直登「ファシズム形成期における反産運動」大江前掲書 251-96 ページ。
- 67) 山下前掲論文 289 ページ。
- 68) 暉峻前掲書 312-3 ページ。
- 69) 近藤康男『協同組合宗論』(1934)『近藤康男著作集』5巻(農山漁村文化協会 1974年) 188 ページ。
- 70) 早坂啓造編『日本民衆の歴史 地域編2 北上山地の山かげから——岩手の人びと』(三

省堂 1984 年)。以下の記述は本書に拠る。

- 71) 丸岡秀子『日本農村婦人問題』(原版 1937 年 ドメス出版 1980 年) 163 ページ。
- 72) 平塚らいてう前掲「協同組合組織による病院の設立」『著作集』5 巻 258 ページ。
- 73) 中村政則『日本の歴史 29 労働者と農民』(小学館 1976 年) 345-50 ページ。
- 74) 森 武麿 大門正克編著『地域における戦時と戦後』第 2 章第 1 節「社会運動と農村再編成——黄金村」(宇佐美正史)(日本経済評論社 1996 年) 120 ページ。
- 75) 賢治の鈴木東蔵あて書簡にはしばしば「組合」として出てくるが、1931 年 7 月 3 日付書簡にははっきり「太田村産業組合」が登場する。東蔵の息子鈴木実によれば「当時の産組にもどしどし出荷」したという。
- 76) 宮沢賢治書簡 1931 年 3 月 21 日付工藤藤一あて。『全集』9 巻 405 ページ。
- 77) 堀尾青史「東北砕石工場主メモ」『四次元』号外 1972 年 3 月 34 ページ。
- 78) 佐藤寛次「東北振興と産業組合」東北振興会編『東北産業振興講演集』(1927) 331 ページ。なお、ここではふれる余裕がなかったが、農政官僚として出発した柳田国男が、一貫して産業組合に期待をかけ、1929 年刊行の『都市と農村』においても農民の協同の必要性を述べていることは、彼の農政学者としての評価ともかかわる興味ある論点といえよう(ちくま文庫版『柳田国男全集』29 巻参照)。
- 79) 高瀬五郎『経済更生夜話』(産業組合中央会出版会 1936 年) 195 ページ。なおこの記述は、1933 年から 36 年にかけて『岩手日報』に連載したものである。
- 80) 賢治が、羅須地人協会時代に、当時なじみのうすかったトマトを栽培し、また花やさいやチューリップを植えたことは彼の非現実性のあらわれとみられているが、この時代に「経済更生」と称してこのような宣伝がおこなわれていたのである。
- 81) 中村政則 前掲書 349 ページ。
- 82) 米田佐代子「無産婦人運動の成立と展開」『講座現代の婦人労働』4 (労働旬報社 1978 年) 211-26 ページ。
- 83) 米田佐代子「解説」『著作集』6 巻 411-36 ページ。
- 84) 宮沢賢治書簡 1933 年 9 月 5 日付大谷忠一郎、寺田弘あて。『全集』9 巻 593-4 ページ。
- 85) 「春と修羅」第二集 313 「産業組合青年会」『全集』2 巻 421-2 ページ及び 486 ページ。
- 86) 宮沢賢治書簡 1933 年 9 月 11 日付柳原昌悦あて。『全集』9 巻 597 ページ。
- 87) 米田佐代子「人権と民主主義」『講座日本歴史』13 巻「歴史における現在」(東大出版会 1985 年) 205-7 ページ。

(1997 年 1 月 13 日受理)